

就学前児における過剰な援助者に対する評価

坂口 桃彩

援助行動は他者からの社会的評価に関わる向社会的行動の1つである。ヒトは乳児期から援助行動を行う他者を選好し、さらに幼児期になると、援助する際の行動目的や意図なども考慮しつつ、援助者を道徳的な人物だと評価したり、社会的パートナーとして選択したりする。このように、ヒトは生後早期から援助者に対して良い社会的評価を行うことが先行研究から示されてきた。しかし、実社会では、援助をすることが必ずしも良い評価につながるわけではない。時として、被援助者が必要とする程度を超えて行われる過剰な援助は、「ありがた迷惑」や「おせっかい」としてネガティブに評価される。このような過剰な援助の場合であっても、幼児は援助者に対して良い社会的評価を与えるのだろうか。それとも、援助の程度を考慮して、柔軟な評価を行うのだろうか。

本研究では、就学前児が過剰な援助、適切な援助、援助なしの3種類の行動に対して、第三者視点からどのように評価するのかを検討した。評価の指標には、各種の行動をとるエージェント（物語中の登場人物）に対する好意度、およびパートナー選択を用いた。就学前児は、援助を行うエージェントを援助を行わないエージェントよりも選好し、パートナーとして選択すると予測した。また、過剰な援助エージェントの好意度、およびパートナー選択割合は、適切な援助エージェントに比べて低くなると仮説を立てた。

本研究は、5-6歳児63名を対象に調査を行った。調査はリッカートスケールを使った回答方法の練習、紙芝居を用いた物語の読み聞かせ、物語の内容についての理解度確認テスト、評価質問で構成されていた。物語中では、登場人物Pが問題に直面し、適切な援助を行うエージェント、過剰な援助を行うエージェント、援助を行わないエージェントが三者三様の行動をとった。参加児に各エージェントに対する好意度を7件法で尋ねた。また、3人のエージェントのうち、もし参加者自身が助けようとしたら誰に援助を依頼するかを3択で尋ねた。前者を好意度得点、後者をパートナー選択得点として算出し、参加児の登場人物ごとの評価が異なるかを検討した。

分析の結果、好意度、パートナー選択ともに援助を行ったエージェントは援助を行わなかったエージェントよりもポジティブに評価された。しかし、過剰な援助を行うエージェントと適切な援助を行うエージェントとの間には評価の差は特定されなかった。したがって、就学前児が援助を行うエージェントを援助を行わないエージェントよりもポジティブに評価するという仮説は支持されたが、過剰な援助者に対する評価が適切な援助者よりもネガティブになるという仮説は支持されなかった。

本研究の結果から、5-6歳児は援助の程度が過剰か適切に関わらず、援助者をポジティブに評価することが示された。その要因として、援助行動の程度よりも援助行動の生起自体を基準に評価した可能性、物語中に描かれた過剰な援助者と被援助者の身体的距離の近さが友好関係の尺度として解釈された可能性、該当年齢では援助は良いことだが過剰な介入は良くないなどの複数の観点からの評価ができず、援助の有無といった単一の基準軸のみでしか他者評価ができない可能性が考えられる。

今後の研究では、本研究で用いた実験課題を改良し、就学前児がいつ、どのような状況であれば援助の程度に応じた柔軟な社会的評価を行うことができるのかをさらに詳細に検討していきたい。加えて、援助行動自体の善悪判断だけでなく、援助の程度を加味した複数の基準軸での他者評価が可能な年齢を特定することで、援助行動に対する社会的評価の発達的变化を明らかにしていきたい。（比較発達心理学）